
俺様王子とヴァンパイアの涙

土師 玲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺様王子とヴァンパイアの涙

【Nコード】

N5267F

【作者名】

土師 玲

【あらすじ】

俺様な王子、ラトゥルフエルクが、叙勲式の会場で妙に怯える青年を発見した。そこから、話は少しずつきな臭くなり、やがて王都が独立をもくろむヴァンパイアたちに襲われるのだが……。

第1章 叙勲式

第一章 叙勲式

壮麗で、優美なつくりの城は、ひどくにぎわっていた。かつらをかぶり、装飾品でかざりたて、布を無駄なくらいに使った衣装を着た貴族たちが、わんさと城内を行き来している。笑いさざめきが時々起り、時々、楽しそうでひとときわ高い笑い声がひびく。

今日は、場内の広間で、じょくんしき叙勲式が行われるのだ。

そんな人の波の中を、楽しそうに歩く少年が一人いた。礼装は身につけているものの、比較的簡素で、動きやすい服装をしている。

すそのふくらんだ短いズボンなどをはいている人々を横目に、少年はくるぶしくらいまである長い貫頭衣をまとっていた。

が、それでもその少年はよく目立った。

夢見る乙女が望む姿そのものの白馬の王子さながらの容姿をしているせいだ。

金色の巻き毛に、大きな碧玉の瞳。

白い肌に、整った鼻筋。

その少年こそ、ハルファリア王国の第一王子そのひとだった。名を、ラトウルフェルク・ニリム・ハルファリアという。

本人は至って気楽に、ラティって呼んでよと言っているが、まわりは困り果てていた。

なかでも、一番の被害をこうむっているのが、付き人にさせられ

た貧乏貴族の次男坊、ルーヴィンだ。

彼は今日も必死だった。

「王子、お願いですからもっと身なりをきちんとなさってください」
「充分だろ。」

「たかが叙勲式じゃないか」

「たかがじゃありません！ 王族の権威を示す大切な儀式なんですよ」

「どうでもいいよ」

王子はそう言い捨てて、すたすたと城内を散歩しつづけた。

やがて、一階部分を通り過ぎ、階段をのぼると、今日叙勲を受けるものたちが控えている控室にたどりつく。

ラティはためらいもなくその扉を開けて、中にいた者たちの視線を一気に浴びた。

「お、王子い」

ルーヴィンの嘆きをよそに、ラティは緊張と突然の来訪者に驚く叙勲者たちに穴があくほど見られるのなどものともせずに、いった

「やあ、今回はみなおめでとう。」

僕からお祝いをいわせてもらつよ」

が、誰もなにも言えない。

「王子、正式な挨拶は後です。もう、戻ってお着換えになってください！」

「ええ、つまんねえ……お？」

ラティは、ふとひとりの青年に目をとめた。

ルーヴィンも、つられてそちらを見やる。すると、なにやら部屋の隅でガタガタと震えている青年がいるのを見つけた。

彼も叙勲者らしい。

ラティは、興味をひかれた様子で、いつものよくないことをたくらむ時の微笑みを浮かべて、青年に近づいて行った。

「あいつがくる。」

あいつがくる。

あいつがくる〜う」

頭を抱えて震えている青年に、ラティは声をかけた。

「なんでそんなにおびえているんだ？ 今日の名誉の日だろう？」

青年は顔をあげて、ラティを見ると、悲鳴を上げた。

「ひい、ほうっておいてくれ」

「なんだよ」

「王子：そういうときは、もっと優しくですね」

ルーヴィンは、ラティをさがらせて、青年に語りかけた。

「どうかしたんですか？ なにか心配事なら、事前に教えてくださ
い。」

できる限りの対処はいたしますので」

「あ、あの、これが」

そう言つて、青年が差し出したものは、赤い字で書かれた脅迫状
だった。

「これは」

「またベタな脅迫状だなあ」

「王子：うゝん、困りましたね。こういうものは、もっと早く教え
ていただきますと、とにかく、護衛を手配いたしましょう。」

「こついの、多いんですよ」

「ああ、まてまて。僕がやる」

「は？ なに言ってるんですか。あなたには大切なお仕事が」

「その前に終わらせりゃいいんだろ。任せとけ。来い、この優男！」

ラティは、そう言い放つと、ルーヴィンが反応する間もなく、青
年をひきずって、部屋を出て行ってしまった。

残されたルーヴィンは、急いで追いかけたが、どこにも見あたら
ない。

また、してやられた。

「あんのバカ王子〜っ！」

ルーヴィンはそう叫ぶと、ラティを探すために、しぶしぶ駆けだ

した。

第2章 警備隊舎

まんまとルーヴィンをまいたラティは、いつものように見張りの少ない裏門から街へと繰り出した。

もちろん、服装の過度な飾りははぎとり、その辺にほうり捨てる。門番はというと、昔とあるネタで脅してあるので、大丈夫だ。

「さて、と、まず名前だな。」

一応、僕のこととはしっているんだろう？」

「もちろんです殿下」

男は青ざめたまま答えた。

「なら、お前の名前とこの脅迫状についての心当たりを教えてもらおうか？」

「私はハンターです。ハンター・デュ・リュック……心当たりは、ありますね」

男、ハンターの言葉に、ラティは思わず笑みを浮かべた。

ハンターはいかにも女好きそうなおいがする。また、女に好かれそうなおいでもある。

昼日中の街にはあまりそぐわない、夜のおいがする男だ。

何より、自分はモテると思っ込んでいる。

ラティは楽しくなってきた。

コイツはたたけばいくらでもほこりが出そうだ。

外見は少々キザで、上の布に切れ目を入れて、下の布を出して膨らませるスラッシュというかざりがふんだんに使われ、派手な帽子をかぶっている。

顔のつくりは綺麗なほうで、品があり、体はとても大きい。

ただし、瞳はにこっていた。

「言ってみろ。」

叙勲式を無事受けられるように手配してやってもいいぞ。

ただし、心当たりのヤツのことを教えるのが条件だ。

僕は日々退屈していてな、少々刺激がほしかったところなんだ。僕に犯人探しを任せてくれるなら、見返りに、お前に警備兵を十人くらいつけてやる。

どうする？」

ラティは笑みを浮かべたまま、試すような探るような視線でハンターを見た。

二人がいるのは通りの端で、近くでは行商人が大声で商品売りさばいている。さらに、旅の大道芸人が、楽しい音楽を奏でてもいた。

おそらく、彼は今夜城で催される宴に出るつもりなのだろう。そんな賑わいにまぎれ、二人の姿が見とがめられることはなかった。

ハンターは、少し迷った挙句、重々しく口を開いた。

「お願いします」

「よし。」

「教えろ」

ハンターはラティにだけひっそりと耳打ちをした。

その内容を聞いて、ラティはニヤリと笑った。

予想したとおり、出てきたのは女の名前だったから。

その頃、ラティを探して城中を走り回っていたルーヴィンは、いやな予感がして立ち止まった。上がった息を必死で整え、つぶやく。

「まさか、もう、外へ出て行っちゃったんじゃない……」

なんだか、めちやくちや的中している気がする。

ルーヴィンは青ざめて、はっ、として一人の人物を思い出した。

そうだ！ 困った時はあのひとだ！

ルーヴィンは、大急ぎで、城の厨房から、近衛隊の隊舎このえたいに向かっ

て走り出した。

人の多い中を走り抜けるのは容易ではなかったが、なんとか近衛隊の隊舎へたどりつくと、すさまじい勢いで隊長の執務室へと向か

った。

とめる隊士はいない。

みな、また王子が何かやらかしたのだとわかっているからだ。

「アーノルド様！」

ルーヴィンは、重い扉をものともせずにあけると、しばし息を整え、身なりをざっとなおした。

「なんだ、また王子様がなにかやらかしたのか」

疲れたように言ったのは、まだ青年といえる年齢の、美男子だった。どこことなくラティに似ているが、雰囲気はまったく逆で、ひどく大人びている。

「また出て行ってしまったようなんです！ もう式が始まるというのに！」

隊長、アーノルドは地の底まで届きそうな、深いため息をついた。彼は、ラティのいここにあたる人物で、城に来てからというもの、ルーヴィンとともに、ラティの後始末係になってしまっていた。まあ、近衛隊の性質上仕方のないことではある。

「しかたあるまい。」

また、お前の出番だ…影武者殿」

「えっ！ そ、そんな…」

「つべこべ言うな！ 時がないのだ！」

「いやですう〜！ 王子に向けた攻撃がどれくらいすさまじいかしってるでしょう！ あんな怒られ方するのもう嫌です！」

「黙れ！ 私とて気持は同じだぞ！」

「顔が笑っていますよーっ！」

その時、叙勲式開幕の鐘が鳴り響いた。

ルーヴィンには、その音が、死刑執行の合図に聞こえた。

第3章 エミリー

第3章 エミリー

ラティは、ハンターに教えられた家の前で、事が済むのを待っていた。

後ろでは、なにやら顔見知りだったらしいハンターとヴィーノがこそそと話をしているのが聞こえる。

「なんでお前が殿下と一緒にいるんだよ」

「いや、私が困っていたら、お声をかけてくださってな、その……ちよつと後悔しているんだが」

「当たり前だろ！ 馬鹿か、お前殿下がどれだけお強いかわかるのか？」

「むろんだよ。」

ハルファリアは聖ハルフィの子孫が治める国だ。殿下がどんな術のマスターかくらひは知ってるさ」

「だってのに、馬鹿だ」「そういうお前こそ、なぜここにいる？」

「弟に頼まれたんだ。」

一度でいいから王都が見てみたいって言うから、そしたら路銀が尽きて、仕事してたら、いつのまにかここまで祭り上げられていたんだ」

「なにやっているんだか」

「………そういう話はもつとこっさり離れて小さい声でするものと僕は思っただが」

さすがのラティもうるさくなってきたと告げる。

後ろから、やたらとおびえた気配がした。

「す、すみません、つい懐かしくて、
と、ハンター。」

「ええまあ、ここでコイツと会うことになるうとは思っても見なくて」

と、ヴィーノ。

「ふうん」

ラティはあからさまに怪しいふたりをじろじろと見つっ、とりあえずにやっとなんて見せた。

この僕に隠し事とはいい度胸だ。後で調べて、そんなことはできなくてやる。

と、心の中で悪魔の笑い声を上げていたラティは、警備兵たちが、女を引き連れてやってくるのを見ると、少し驚いた。

女は実に美しかったからだ。

黒のカールした長髪に、灰色の瞳。体は女らしい曲線を優雅に描き、そこにまとっているのは、体の線がまんま出る、ぴったりの赤いドレスだった。

だが、特筆すべきはその赤い唇からこぼれでる牙だ。

「ヴァンパイアか？」

「ハンター！ あんた、よくもこんな真似をつ！」

「エミリー、もう僕を付け回すのはやめてくれ！ 何度も言うように、僕の気持はもう」

それを聞いて、ラティとヴィーノは一気に白けた。

「なんだ、ただの痴話喧嘩か、もっと面白そうな話かと思えば」

「あー、こいつほら、跡取り息子なんで、モテルんですよ。財産と金の後光がさしているんでね」

「ああっ！」

ヴィーノ、なんてことを言うんだ！ 見てくれよこの伊達っぷりを、僕がどれだけ苦心惨憺しているか知らないくせに、ファッショ

ンを笑うなあ」

「笑ってはいないぞ」

グイーノは大真面目な顔で言った。

「僕も笑ってはいないが、何かそこまで入れ込む理由でもあるのか？」

ラティは首をかしげた。

「だああっ！」

あたしの方を見なさいよ！

このバカ、恩知らず。あたしがかくまってやってたんじゃないの！
少し自由をとりあげるために後ろつけたただけでなによそれ！

もう知らないからっ！

勝手に不細工を押しつけられればいいわ！」

エミリーはまくしたてた。

彼女を捉えている警備兵ふたりの顔が、その剣幕にひきつる。確かに、その形相には恐ろしいものがある。

ラティは嘆息ぎみにいった。

「とりあえず、南へ送り返せ。檻に入れるのを忘れるなよ」

「あたしは猛獣じゃないわよっ！」

「というか、なんで魔物はご禁制の王都にいるんだか。そのところもちゃんと聞いておけよ」

「はっ」

警備兵たちは怯えつつもそう返事した。

「さて、お前はさっさと城へ戻って叙勲を受けてこい。

お前を連れだしたとかで父上に怒られるのは嫌だからな」

「はい、ありがとうございます、殿下」

ハンターは優雅に笑みを見せた。

が、その顔には、どこか嘲るような笑みが浮かんでいた。

第4章 大騒動

第4章 大騒動

それから数日後、部屋でのんびり朝食を摂っていたラティのもとへ、とんでもない報告が届いた。

「殿下、大変です！」

「なんだルーヴィン、朝っぱらから」

寝ぼけて不機嫌な顔のラティにやや腰が引けたルーヴィンは、一瞬言葉に詰まって、それからすぐに気を取り直すと、告げた。

「城下の街で、貧血の人間が頻出しているんです。

理由は不明で、近衛隊が街区の警備隊と協力して調査にあたっているんですけど、首筋に噛みあとがあって、南のヴァンパイアが街に潜伏しているのではないかと。

あまりに多くの人たちが倒れたので、混乱しているんです。

殿下も起きて、いろいろと手伝ってください。

陛下はすでに奔走してらっしゃいますよ」

ルーヴィンは急いでそう告げると、忙しいのか、すぐに部屋を出て行ってしまった。

ラティは、とにかく急いで食事をすませ、使用人が支度するといふのに任せて、久しぶりに正装すると、部屋を出た。いつもより、使用人の数が少ない。

いったい、なにが起こったのかというのか。

そんなことを考えつつ歩いていると、アーノルドとはち合わせた。「殿下、探していたのです。」

城下においでいただきたい。恐らく、今回の件には、殿下の力が必要となるでしょう」

「ああ、分かった」

ラティは素直に頷いて、アーノルドの後に続いて、城を出た。

城下はさらに混乱していた。

倒れたのがほとんど娘であるため、男手は足りているが、とにかく女手が足りずに、みな困っているようだった。

馬車に乗っていたので、詳しい様子は分からないが、向かっている場所は分かった。警備隊舎だ。

やがて、警備隊舎につくと、警備隊長とヴィーノが出迎えた。

隊長は、手に羊皮紙を持って、青ざめている。ラティはすぐにもそれをひたたくて読みたい衝動にかられたが、一応王子殿下だという自覚はあったので、ガマンした。

会議室へ通されると、隊長はさっそく羊皮紙をラティに渡して、言った。

殿下、とにかくまずはそれをお読みください」

「なんだ、そんなに変な顔をして」

ラティは言われたとおり、上座に座ると、それを開いて、読む。続いて、唇から笑いがこぼれた。

「ふうん、これ、僕に対する挑戦状だね。」

今夜、王家に警告に参ります。我らの誇りを変換していただくために。この国の乙女たちは我が手中にある……。

ハンター・デュ・リュックだってさ、ヴィーノ、お前、あいつの正体を知っていたんだろう？ 純血のヴァンパイアだと……何で言わなかったんだ？」

「申し訳ありません。」

彼がこんなものを送ってよこすとは思わなかったのです。それに、彼にはかつて救われた恩義がありましたので、言うわけにはいかな

かった……」

ヴィーノはすまなさそうにうなだれた。

「まあいいさ。代わりに、危険な仕事を任せることにはなるけどね。こんなもの、鎮圧するなんて簡単だよ。」

当主が出てきているわけじゃなく、ただの親戚だからね」

ラティはそう言うと、警備隊長は希望の光がさしたように顔をゆるませてラティを見た。

「僕に逆らうとどうなるか、思い知らせてやる。」

しかも、僕を利用しようとしたな。くくく、いい度胸だ。

アーノルド……太陽の剣の用意をしろ」

ラティが言うと、アーノルドの顔色が変わった。

少しばかりの沈黙の後で、アーノルドは暗い笑みを浮かべて、うなずいた。

「かしこまりました」

「さあ、ねずみとりの始まりだ」

ラティは立ち上がると、不敵に黒い笑みで言い放った。

ハンターは、牙をうずめていた少女の首から顔を上げて、うつすらと笑った。

まだ日が高い。

今いるのは、とある貴族令嬢の寝室だった。

ずっと、このときを待っていたのだ。

父には止められたし、親戚には離縁すると脅されたが、やめる気

はなかった。

叙勲式に受かり、城にもぐりこみやすくしたのもそのためだ。あの王子のおかげで、邪魔なお目付け役のエミリーも排除できた。ずっと、ハルファリアの南の森に閉じ込められてきた鬱憤を晴らせる。

今夜だ。

今夜に警告を発する。

自分の牙に忠誠を誓う乙女たちをすべて人質として、宣言するのだ。

ヴァンパイアたちに、独立領を与えることを。

誇り高きヴァンパイアが王家に飼われるなど、あってはならない。ずっと、そう思ってきたのだ。

父は、そんなものやぶつて暖炉にくべたあと、その辺の毛虫にくわせたと言っていたが、ハンターはそれを後生大事に守り抜いてきた。

それこそ、もう、可愛くてしかたないものを愛できるように。

若いお父さんが幼い娘を溺愛するがごとく、プライドを守り抜いてきた。かべには自尊心と書いた紙を大量に張り付けて眠った。

プライドという本も買った。

熟読したし、きれいな布地でカバーをつけてやり、寝る時は一緒に寝た。

まあ、時々うなされたりはしたが、とにかく、そんな感じでプライドを守ってきたのだ。

ここで負けるものか。

ハンターは、とりだしたハンカチで丁寧に口元をぬぐって、少女をベッドに寝かせると、懷から、プライド（外で読む用）を取り出して、胸に抱き、拳を固めて誓った。

「まだ星とか月とかは見えないが、その辺の壁に向かって。
絶対に、王家には負けないぞ」

そう、プライドにかけて。

第5章 太陽の剣

第5章 太陽の剣つるぎ

聖ハルフィ。

かつて、世界が闇に包まれたところに、英雄、オルコットとともに、その闇を晴らした、魔導士。その彼が打ち立てた王国、ハルファリアには、再び世界が暗黒に包まれたり、魔物の襲撃を受けた際に、それに対抗するための仕掛けが施されている。

それが、太陽の剣だ。

そして、それを発動できるのは、ハルフィの血統に連なるもの、ハルファリアの王族、それも、男子に限られていた。つまり、ラティただ一人ということになる。

王室には、子はふたりしかない。

ラトゥルフエルクと、妹姫のソフィリアだ。彼女も、かなりの魔導の使い手ではあるのだが、ラティには遠く及ばない。そして、そんなラティが、アーノルドと近衛隊、警備隊を伴ってやってきたのは、広場だった。

時は夜。

街は静まり返り、時折、遠くから喧騒が響いてくるのみだ。酔っ払いが喚き散らし、女の嬌声上がる。それだけ。ラティは相も変わらず、楽しそうに微笑みながら、広場中央に鎮座している、ハルフィをかたどった銅像を見上げて、言った。

「ハルファリア王国が第一王子、ラトウルフェルクの名において、封を解く」

と、微かな地響きの音がし、ゆら、と青白い霧のようなものが立ち込める。

それは次第になにかの形を成して行く。

少しずつ、漂う青白い霧は、透明なひとの姿にちかいモノになっていく。

精霊と呼ばれるものだ。

この地下には、水があり、そこには精霊が住まう。

彼らがここに姿を現した、ということは、今まさに、地中に眠る封印が解かれようとしている証拠なのである。

その場に居合わせた者たちは、幻想的で吸い込まれそうな風景に、感嘆の息をもらした。

その中心に、金色の髪をなびかせたラティがいる。

まるで、聖ハルフィの再臨だと、兵士たちは思った。実際、ラティは銅像のハルフィによく似ていた。彼は、美男王とも呼ばれたい、凜として、美しい人物だった。

なのに、まったく浮名を流さずに、ただひとりの王妃を愛しぬいたと言われている。

が、そこへ、闖入者が現れた。

ありとあらゆる道から、吹きだすように、彼らはあらわれた。

目を煌々と光らせ、口からは牙がのぞき、そこからは湯気をたてる唾液が滴っている。血を多く吸われ過ぎたことにより、化け物と化した乙女たちである。

その乙女たちをかき分けるようにして、優雅に現れたのは、ハンターと、その意に賛同したヴァンパイアたちだ。

「ようこそ、おいでくださいました」

「もちろん、こんな面白そうなことに首を突っ込まないわけがないだろう」

ラティは愉快そうに言った。

腰に手を当て、周囲を水の精霊に囲まれている姿は、壮観の一言に尽きた。

ハンターは少しひるんだ。そこへ、兵士たちが槍や剣を突き付ける。

ふたりは、戦の開始前のように対峙した。

「にしても、よくまあ、腹を壊さなかったな。

こんなに大量に噛みついて、血をすするとは……楽しかったか？」
「そうですね。」

こんなに大量に変異させるのは骨が折れましたが、それでも、目的のために腹ごしらえもし、かつ、意のままになる人質を得たのですから、楽しくはありました」

「そうか。」

それは良かった」

ラティはそう言うと、口端をあげたまま、告げる。

「僕の国に手を出したお前は、愚かだよ。」

おまえは、僕がどういう人間がしらないだろう？」

「いいえ、そうでもないですよ。」

わがままで、他人を踏みつけにする、その生き血をすすり、生きながらえる。贅沢を好む。どこまでも、我らとたいして変わりのない子供。

聖ハルフィの名が泣きます。

希代の術士だとは聞きましたが、我らは不死身だ。

さて、どうでしょう？

私は、手紙にも書いたように、我らのための独立領が欲しいだけです。

簡単なことでしょうか？ それで、彼女らを救えるのですから、貴

方は英雄として、後世に名を残すでしょう」

「なんだ、知らないんだな」

ラティは憐れみを込めて言った。

と、地響きがして、大地がせりあがる。

びしつと意志の割れる音。それに続いて、地下から、青白い炎が噴き出した。

ラティは、それをなんの感慨もわからないような眼で見つめていた。

炎は、瞬く間に、王都全域に広がっていく。

静かに、音もなく。

王都は、青白い炎により、その全景を浮かび上がらせた。

第6章 決着

第6章 決着

青白い炎は、王都にある形を浮かび上がらせた。

結界。

それは、ありとあらゆるものから邪なるものをひきはがし、ありとあらゆる邪なものはじき返し、あらゆる聖なるものを閉じ込める。

王都は、ひとつの巨大な結界なのだ。

聖ハルフィは、この術を持って、たくさんの人々を救い、オルコットと力を合わせて、闇を封じ込めたのだ。

ラティは、その凄まじい力の中央に立ち、制御していた。

本当は、こんなものは撤去してしまいたい、と内心では思っていたのだが、役に立つ使い方を見つけた。それが、今やろうとしていることだ。

「良く見ている、ハンター・デュ・リュック。

僕は、ハルフィではない。ラトウルフェルクだ。お前の力など要らない。自分の手で、偉業を成し遂げる。

これは、その布石のひとつになるだろうが、な」

ラティは笑って、呪を唱えた。

ハンターは、それを余裕尺尺に見つめていた。ゆるぎない自信のために、彼は動かなかった。その仲間たちも、同じように、ただ立って、成り行きを楽しむように見つめているだけだった。

「かの古なる炎^{いにしえ}、終わりの言葉を言つるとき、聖なる輪廻が回る。
高き光の奥深くして、あざやかなるとき、我は心に告ぐる。

我は多くの焰が、下りめぐり、美々しくなるを見るにつけて、我
が目を限りなき美しさ、威力^{ちから}として目標^{めあて}に向けたり」

空気に振動が走った。

「ヴううううっ！」

「あああ、アアア」

牙を受けた乙女たちが、うなり声を上げてばたと倒れ始めた。
その体に、青白い炎はまわりついて、中から黒いものを吸い出し、
燃やしつくして行く。

すると、彼女たちからは牙が消え、安らかな顔つきに戻っていく。

「こ、これは！」

「聖ハルファイの浄化結界だ。

高貴なるヴァンパイアのくせに、そんなことも知らなかったのか」
ラティは嘲笑うように言うと、目を細めた。

ハンターはすぐに臨戦態勢に入った。爪を長くのばし、気をまと
う。

場に緊張が走る。

「ヴィーノ！」

鋭い叫びとともに、困惑するヴァンパイアたちの所に、ヴィーノ
が現れ、次々と、まるで舞うように斬り倒して行く。その瞳は、瞳
孔が縦に裂け、炯々と光っている。

そう、彼は人ではなかった。

正確には、ひとであるのは半分だけで、もう半分は竜族のものだ
った。

ラティはそれをすぐに見抜き、受け入れた。代わりに、彼に命じ
たのだ。吸血鬼どもを殺さないように、動けなくさせろ、と。それ

は、ヴァンパイアの身体能力を鑑みれば、恐ろしく危険なことだった。

が、ラティは信じていた。

彼なら、やれる、と。

「ヴィーノ！ なぜ邪魔をする！

お前を助けた恩を忘れたのか！」

「助けられたからと言って、お前の下僕になるつもりなどない！」

ヴィーノは吠えて、襲いかかってくる他のヴァンパイアたちと切り結ぶ爪と剣のあたる甲高い音だけが響く。

「助勢するぞ」

「待て」

警備隊長が見かねて飛び出しかけたのを、ラティは制した。

「なぜです！」

「入っていったら、確実に死ぬぞ。少し待て、それより、僕がお前たちを連れてきたのは、彼女らを運び、助けるためだ。全員警備隊舎や、城に運び、身元が割れたら家へ帰せ。

いいか、これは命令だ。

ヴィーノの助勢は、僕一人で十分だ」

「分かりました」

「アーノルドも、加われ」

「はい」

アーノルドは頷いて、すぐに近衛隊の隊士に命令を下した。

太陽の剣、つまり浄化結界は、少しずつ消えてきている。ラティは一瞬だけそれを顕現させたのだ。一瞬で事足りた。あとは、ヴァンパイアどもを捕まえるだけ。

ラティは、剣を抜いた。

飾りものではない、武骨な剣だ。ずしりとした重みを感じて、微笑む。

久しぶりに、手ごたえのある戦いになるだろう。

「ヴィーノ！ おまえはハンターに集中しろ。雑魚は僕が引き受ける」

ヴァンパイアA、B、C、D、Eは色めきだった。

よくもコケにしたな、とか、調子に乗りやがって、など、追い詰められたちんぴらがはくようなセリフをまき散らして、襲いかかってきた。ラティは、それを簡単にいなした。

本当は、魔導を使ってもよかったのだが、つまらないからやめたのだ。ラティは、ずる長い衣をもともせず、器用に立ち回り、相手を追い詰め始めた。

ヴィーノは、それを見て、大丈夫だと判断すると、一気に片をつけにかかった。

ハンターの動きは、俊敏なだけで、洗練されていなかった。戦いに明け暮れてきたヴィーノにとって、彼を殺さずにとらえるのは、簡単なことだった。

襲いくる爪をはじき、ハンターがバランスを崩す。ヴィーノは肩に切っ先をめり込ませ、渾身の力を込めて、貫いた。丈夫なヴァンパイアの皮膚を食いちぎった剣は、ところどころ欠けてしまった。

だが、それで終わりだった。

地面にぬいとめられたハンターは、標本の昆虫よろしく、もがいた。

が、ヴィーノは、そんな彼の頬を殴った。

「がっ！ …… よくも、私の美しい顔をっ」

「うるさい、裏切り者っ！」

また三発殴る。ヴィーノは、悔しげに顔をしかめた。その眼尻には、光るものがあつた。

「なんで、こんなバカなこと」

「見返してやりたかったのだ。私は、散々バカにされて生きてきた。だから……」

「俺や、色々なひとを裏切っても、か」

「そうだ。なぜ、お前はあの王子に味方したんだ」

「受け入れてくれた。」

俺の正体を知っても、動じなかった。普通に扱ってくれたし、実力も認めて、この国に暮らすことをあつさり、簡単に受け入れてくれて、その上で、夢を教えられた。

俺は、それに賛同した。それだけだ」

「……夢、か。私にも、かつてはそんなものがあつたが、今では」

ハンターは、ぐったり、と地に身を横たえた。
終わったのだ。

なにもかも。

「この命、好きにすればいい」

そう、つぶやいて、目を閉じた。

終章 これから

終章 これから

ラティは、四方八方から襲いくる爪を身を低くしてかわし、足を払った。

ヴァンパイアはもんどりうつて倒れる。

「鎖よ！」

ラティはすかさずに、古代語で告げる。

と、地面が変化して、ヴァンパイアを地にぬいとめた。

これで全員だ。

ラティは、少し切れた息を整え、自嘲した。なまっている。こんなことでは、なにもできない。明日から、また鍛錬に身を入れたほうがよさそうだ。

「お前、なぜ俺たちを殺さない」

「ん？ そんなに死にたいのか？ なら止めないが、まあ、死んだらお前の秘密を公開するとうかな。」

たとえば、その女、彼氏に振られた腹いせに、その男の家にみずをなげこみまくった、とか、その男は、血を吸おうとした人間に反撃されて、1か月寝込んだとか…… もっと恥ずかしいこと知っているぞ」

ラティは邪悪な笑みを浮かべて、くつくくつと笑った。

ヴァンパイア5人は青ざめた。

「す、すみませんでしたっ！」

「今日から悔い改めますっ」

秘密を少しバラされたふたりが、涙を滂沱と流しつつ懇願する。

それを見て、他の3人もつばを飲み込み、追従した。

「ならば、今日から僕の僕だな。」

役に立てよ、せいぜいね」

ラティは真黒な微笑みを浮かべて、ハンターとヴィーノを見やった。

どうやら終わったようだ。

ゆっくりと、そちらに向かって歩いて行く。

「殺せ」

「なぜ？」

ラティは絶望に沈むハンターを見て、訊ねた。

「なぜ、もう私はこれで南の森へは戻れない。生き恥をさらしすぎた。」

しかし、死ねない。だが、お前ならできるだろう。だから、殺せ」
嫌だね。

なんでわざわざこの綺麗な手を汚さなくちゃなんないのさ。それに、お前が欲しいものは、領地なんかじゃなくて、親に認められることだろう？

だったら、死ぬな。

というか、殺さない。しばらくは、妙な考えを起こさないように、僕の僕にしてやる」

「は」

ハンターが反論を叫ぶ間もなく、ラティはその額に、てのひらを当てて、肩の剣を引き抜くと、言う。

「汝は私の隷属なり」

ぱあっ、と光が漏れたあと、ハンターの頬には、植物の文様みたいなものが刻まれた。

「なっ、何をするんだ！」

「自殺防止の措置だよ。」

僕には、あらゆる僕が必要なんだ。せつかく有用な命、散らして

はもつたいない。僕には、夢があるんだ。このハルファリアを、魔物も人も暮らせる国に変えるという夢がね。

そのためには、君の協力もいる。

という訳で、君は僕のしもべだ。

それと、君に会いたいという人がいるから、会ってみるといい」

言って、ラティは手招きした。

暗がりからうつそりと現れたのは、長身ので痩せぎすの男性と、あのエミリーだった。ハンターは驚きに目を見開き、肩を押さえつつ起き上がった。

「全く、このバカ息子めが」

「父上」

ハンターは情けない顔をして、顔をうつむけた。

「今回のことで、お前はもう森の住民には戻れぬ。その愚か者どもも含めて。」

が、わしは、お前の死は望まぬ。

王子のために働くといだろう」

「しかし、私など」

「わしが、本当にお前のことを認めていないと思っていたのか？

断じて違う。だが、お前は妙なプライドに固執していて、聞く耳を持たず、かたくなで、愚かだった。

わしは、変わるのを待っていたのだ。

が、今回のことで、それを後悔しておる。

もっと、話をするべきだったと、な」

ハンターは、驚きに顔を上げた。その頬を、光るものが伝った。

「本当に、馬鹿よね。でも、あたしはそんなあなたが嫌いじゃないわ」

エミリーは呆れたように笑うと、かがみこんでハンターを抱きしめた。

ラティは、ハンターの父、デュ・リュック卿と目が合った。彼はかすかに会釈した。その老いた瞳に感謝の意が浮かぶのを見て、ラ

ティはにやつとした。

「ヴィーノ、城に戻るぞ」

「いいんですか？」

「ああ。」

まあ、めでたしめでたし、ってとこさ」

ラティはそう言つて、ぶら下げたままだった剣を鞘に戻した。

数日後。

街はすっかり落ち着きを取り戻し、ハンターと自分の意志で残つたエミリーと、ヴァンパイアAとEは、王都内に古ぼけた館を与えられて、平穩に過ごしていた。

ラティは、相も変わらず退屈そうに日々を過ごしていたが、少しずつ、計画を練つたりして楽しんでいた。

今日もまた、自室のテーブルに羊皮紙を何枚も広げて、なにやら書き綴つたり、図を描いたりしている。ルーヴィンには、なにが書かれているのかはさっぱりだ。

ラティはすさまじい癖字なのである。

「殿下、最近おとなしいですね」

ふと、そんな感想を口にする。

「うん？ ああ、そうだな、やることがあるからだろ」

そう言つて、また何か書きつけると、部屋の中で護衛をしていたヴィーノが面白そうにラティを見た。

「そうだ、そのうちにお前も忙しくなるぞ、ルーヴィン。」

なにせ、太陽の剣の封を解いてしまったからな……あれに反応した各国の反応が楽しみだよ」

「なんか、いやな予感がしますよ」

ルーヴィンはティーポットを持つ手をとめて、ラティをまじまじ

と見つめた。

なんとなく、最初の頃より、彼のことが分かってきたような気がする。

はつきりいつて、この国の王子はむちゃくちゃだ。

けれど、それは本当の姿ではないのだ。………多分。

そう思って、ルーヴィンはカップに暖かなお茶を注いで、外を見た。

美しく晴れている。

きっと、明日も良い天気だろう。

F i n

ここまで読んでくださった方、ありがとうございました。

このお話は、これで終わりとなります。よろしければ、感想などを頂けると嬉しいです。

終章 これから（後書き）

完結いたしました。お付き合いくださった方、ありがとうございます。王子様とヴァンパイアの話が書きたくて始めたものなのですが、書いている時はとても楽しかったです。この話の外伝などもありますので、よろしかったらそちらもご覧ください。

最後に、評価をください。面倒だと思いますが、唯一の励みなので。では、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5267f/>

俺様王子とヴァンパイアの涙

2010年10月8日15時43分発行